

## 平成 26 年度事業報告 (平成 26 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日)

公益社団法人日本馬術連盟（JEF）は、平成 26 年 3 月 6 日の平成 25 年度第 7 回定例理事会において承認された平成 26 年度の事業計画および収支予算に基づき、以下の事業を実施した。なお、一部については、期中に補正を行った。

平成 26 年度に開催された特に重要な国際大会として、世界馬術選手権大会(2014/ノルマンディー)および第 17 回アジア競技大会（2014/仁川）があった。

世界馬術選手権大会には、障害馬術およびエンデュランスが団体に参加した。

アジア競技大会では、団体において障害：銅、馬場：銀、総合：銀と 12 年ぶりに 3 種目ともメダルを獲得した。個人においても障害馬術で、銀と銅メダルを獲得した。一方、今回のアジア大会は、アジア地域のレベルアップが痛感させられた大会でもあり、今後、東京オリンピックに向けて競技力強化について一層の努力の必要がある。

JEF は、オリンピック会場がレガシーとして活用できることが、馬術競技の振興のため重要であると、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会等へ働きかけをしてきたところであるが、平成 27 年 2 月の I O C 理事会において、東京オリンピック・パラリンピック馬術競技のメイン会場を J R A 馬事公苑に変更することが決定した。

馬術競技を幅広く普及するため、インターネットを活用した馬術大会の LIVE 放映を本格運用したが、昨年の 8 倍超と多くの馬術ファンが視聴し好評であった。

JEF 会員数は、平成 19 年をピークに以降減少基調にあったが、8 年ぶりに増加した。

各事業については、以下のとおり；

### 1. 馬術の普及・振興

#### (1) 馬術に関する情報システムの運営

- ① ウェブサイトを運営し、競技会の情報や規程の改正などの情報を迅速に広報した。
- ② 競技会の実施要項や成績速報、講習会の案内などを迅速に掲載するとともに、『馬術情報』とウェブサイトをクリックして広報の充実を図った。
- ③ インターネットを活用し、馬術大会の LIVE 放映を 10 回実施した。

#### (2) 機関誌発行

- ① 情報を的確に伝達し、馬術の振興および各種記録の保存に資するため、月刊機関誌『馬術情報』を刊行した。
- ② 『馬術情報』を日馬連会員、関係団体、マスコミ各社に配布するとともに、購読希望者に対し頒布した。

#### (3) 馬術関係資料の作成・配布

- ① 各種規程集および日馬連で扱う馬術競技の紹介・ルール解説等の資料を作成し、頒布した。また、競技会プログラムにもルール解説を掲載し、競技場にて配布した。

- ② マスメディアに対し情報を積極的に提供した。特に、朝日新聞、神戸新聞社、静岡新聞、日本放送協会、静岡放送には大会の後援を依頼し、広報を充実させた。また、NHKの全日本障害パートI放映に協力した。

#### (4) 各種表彰

- ① 永年に亘り馬術界に功績のあった人馬4名14頭を表彰した。また、国内外競技会において、優秀な成績を収めた人馬4名8頭を表彰した。
- ② 競技馬の資質向上のため、優秀な成績を収めた乗馬に対して飼育奨励金を交付した。
- ③ 競技馬の資源確保および調教技術向上を図るため、優秀な成績を収めた内国産馬（元競走馬を含む）に対して飼育奨励金を交付した。
- ④ 優秀な成績を収めた内国産乗馬の生産者に対して感謝状を贈呈した。

#### (5) 馬術基盤の維持拡大

- ① 組成団体に対しその加盟する団体が所有する馬匹について、飼育費助成および優秀乗馬助成を行った。また、都道府県馬術連盟および組成団体等の事業費・事務費の助成を行った。
- ② 馬事関連団体と連携し、馬術の普及・振興に努めた。
- ③ 内国産馬の振興を図るため、内国産馬限定競技を主催競技会に組み入れるなど、内国産馬の活用を促進した。

## 2. 会員と乗馬の登録

- ① 選手や指導者あるいは団体の活動をサポートするため、会員（個人6,155、県馬連所属団体375、組成団体所属団体268）および乗馬（3,735）の登録を行った。
- ② FEI公認競技会に参加する人馬および競技役員のFEI登録事務を実施した。
- ③ 「JEF情報システム」を活用し、登録における会員サービスの向上および事務の合理化を図った。

## 3. 競技会規程の制定、各種資格の認定

### (1) 競技会規程の制定・整備

JEFの各種規程の制定および改廃を行った。また、FEI各種規程の制定・改廃に対応して、国内規程を改正し、FEI規程の国内適用を図った。

### (2) 競技役員資格

- ① 審判員等技術役員資格者の認定および資格保持者の技術向上のため講習会を実施（9回）するとともに、都道府県等が開催する講習会を公認（12回）した。
- ② 障害馬術競技で使用するコースの設計および設営を担うスペシャリストとしてのコースデザイナー講習会を開催（2回）し資格を認定した。
- ③ 講習会の内容の統一のため、講師の研修会を開催（1回）した。
- ④ 国際競技役員養成のためのFEI公認講習会を開催（1回）した。

### (3) 指導者資格

- ① 日本体育協会公認スポーツ指導者  
(公財)日本体育協会が制定する公認スポーツ指導者制度に基づく統一カリキュラムによる日体協公認馬術コーチ養成専門科目講習会を開催し、馬術に特化した馬術コーチ(14名)・指導員(4名)の増員を図った。
- ② 日本馬術連盟認定馬術指導者  
馬術指導者の資格認定・更新ならびに専門知識習得と資質向上のため、日馬連独自のカリキュラムによる JEF 認定指導員養成講習会を開催し、指導者(32名)の増員を図った。
- (4) 選手の資格認定  
主催・公認競技会・国際競技会参加のための騎乗者の資格認定・登録を行った(A級38名、B級441名、C級130名)。  
都道府県等が開催する騎乗者資格認定のための講習会(B級30回、C級32回)を規定に基づいて公認した。
- (5) 競技会の公認  
JEF 公認競技会のカテゴリー制・馬のグレード制を円滑に運営し、活性化に努めた(障害111、馬場58、総合6、エンデュランス18:中止1回含む、合計193:中止1回含む)。

#### 4. 選手の強化

- ① 東京オリンピック強化対策プロジェクト等を開催し、オリンピックに向けた強化の在り方について検討した。
- ② 騎乗・調教技術の向上を図るため、海外からコーチを招聘して強化訓練を実施した(障害2、馬場1、総合3)。
- ③ 文部科学省の進めるナショナルトレーニングセンター中核拠点施設整備の馬術競技強化拠点として御殿場市馬術・スポーツセンターを活用した(42回、内JEF16回)。
- ④ 国際レベルの選手を育成するため、ヤング・ジュニア層の発掘および強化のため研修会を開催(9回)するとともに、海外の競技会・強化訓練等に若手選手等を派遣した(障害3回、馬場2回、総合3回)。
- ⑤ 優秀な成績を上げた選手をナショナルチームメンバーに認定した(障害9人馬,プログレス20人,プログレスジュニア21人・馬場5人馬,プログレス41人,プログレスジュニア19人・総合3人,プログレス15人,プログレスジュニア9人)。
- ⑥ また、ジュニアアスリート担当のJOC専任コーチングディレクターを2名(馬場1、総合1)設置し、将来を担う若手の育成を図った。

#### 5. 競技会の開催

##### (1) 競技会の開催

全日本障害馬術大会(パートI、パートII、ジュニア)、全日本馬場馬術大会(パートI、パートII、ジュニア)、全日本総合馬術大会(パートI、ヤング/ジュニア)、全日本エンデュランス馬術大会を主催した。また、障害・

馬場の全日本ジュニアおよび全日本ヤング総合馬術大会は JOC ジュニアオリンピックカップ大会として主催した。

(2) 国民体育大会の共催

第 69 回国民体育大会馬術競技（長崎県雲仙市）を文部科学省他の団体とともに主催した。

(3) FEI 公認競技会

- ① JEF 主催により、FEI 公認馬術大会を 3 回（チルドレン障害 1、馬場 1、総合 1）開催した。
- ② 日本国内で会員団体が主催する FEI 公認馬術大会 12 大会（障害 7、エンデュランス 5）の開催を支援した。

(4) ドーピングの防止

- ① 打ち合わせ会等での関係者に対する指導を通じて、馬のドーピング防止に努めた。
- ② 主催競技会（39 頭）および FEI 公認大会（23 頭）において馬ドーピング検査を 62 頭に実施した。
- ③ 日本アンチ・ドーピング機構（JADA）と協力して、競技者のドーピング検査を 15 名に実施した。

6. 国際競技会への派遣・支援

- (1) 国際競技会等へ選手・役員を派遣（障害 7、馬場 2、総合 1、エンデュランス 1）し、競技力向上ならびに海外情報収集に努め、併せて国際交流・親善を深めた。
- (2) 世界馬術選手権大会(2014/ノルマンディー)に、障害馬術（団体・個人）4 人馬、エンデュランス（団体・個人）5 人馬が出場した。障害馬術は、第 2 ラウンドに進むことができず、団体で 25 位、個人で杉谷泰造&アヴェンティノ 3 の 73 位が最高位であった。エンデュランスは、ホースインスペクションで 1 人馬が失権となったため、4 人馬の出場となった。コースコンディションが非常に悪く、完走率が 23%（完走人馬：165 人馬中 38 人馬）であり、残念ながら日本チームから完走人馬は出なかった。
- (3) アジア競技大会（2014/仁川）に、障害馬術（団体・個人）4 人馬、馬場馬術（団体・個人）4 人馬、総合馬術（団体・個人）4 人馬が出場した。障害馬術の団体戦には 10 カ国・地域が参加した。結果は、1 位：カタール（減点 0）、2 位：サウジアラビア（減点 4）、3 位：日本（減点 12）となり 12 年ぶりに団体メダルを獲得した。個人戦では、平尾賢選手&ウラノ号が、金メダルをかけてサウジアラビアの選手とジャンプオフに臨んだが、残念ながら銀メダルとなった。杉谷泰造選手&アヴェンツィオ号は、8 人馬のジャンプオフを制して、銅メダルを獲得した。馬場馬術の団体戦には、8 カ国・地域が参加した。結果は、1 位：韓国（71.746%）、2 位：日本（69.842%）、3 位：台湾（67.386%）で、日本は 2 大会ぶりにメダルを獲得した。個人戦では、佐渡一毅選手&ウイネットウ号の 5 位が最高位であった。総合馬術の団体戦には、7 カ国・地域が参加した。結果は、

1位：韓国（減点 133.00）、2位：日本（減点 142.50）、3位：香港（減点 153.80）であった。個人では、田中利幸選手&マーキードプレスコ号の5位が最高位であった。

- (4) 平成 26 年度はワールドカップ日本リーグ優勝人馬が CSI-W Final へ参加しなかったため、輸送支援は実施しなかった。
- (5) 世界各国における FEI 公認馬術大会に参加する日本選手（障害 21 名延 1,160 頭、馬場 6 名延 44 頭、総合 4 名延 24 頭、エンデュランス 3 名延 3 頭）を支援した。
- (6) 国際馬術基盤強化推進支援事業（JRA 特別振興事業）
  - ① 世界馬術選手権大会の障害馬術 4 人馬、アジア競技大会の障害、馬場、総合のそれぞれ 4 頭、合計 12 頭の輸送を行った。
  - ② 2014 世界馬術選手権の出場資格の取得に向けて、CDI 3 \* を 1 回、アジア競技大会に向けて CC I 1 \* を 1 回開催した。
  - ③ 障害馬術の世界馬術選手権大会及びアジア競技大会の代表選手選考競技会をドイツで開催した。馬場馬術のアジア競技大会代表選手選考競技会を、ドイツおよび御殿場で開催した。

## 7. その他

- (1) NF 活動（National Federation : 国内を統括するスポーツ団体）  
FEI およびアジア馬術連盟の活動に参画し、国際情報を迅速に収集し、日本馬術界の国際的地位向上に努めた。また、日常的に FEI と緊密に連携し、国際的に活動する選手を支援した。
- (2) 2020 東京オリンピック開催準備  
東京オリンピック・パラリンピック組織委員会、東京都および J R A と、2020 東京オリンピック馬術競技会場について検討し、FEI の審査を受け承認された。

## (1) 会員登録数

区 分	H26. 3. 31 (A)	入会	退会	H27. 3. 31 (B)	差引増減 (△減)	対前年比 (B/A)
① 正会員	55	0	0	55	0	100.00
イ. 都道府県馬術連盟	47	0	0	47	0	100.00
ロ. 組成団体	4	0	0	4	0	100.00
ハ. 学識経験者	4	0	0	4	0	100.00
② 登録会員	6,879	664	616	6,927	48	100.70
イ. 個人	6,251	633	600	6,284	33	100.53
ロ. 県馬連に所属する団体	363	18	6	375	12	103.31
ハ. 組成団体に所属する団体	265	13	10	268	3	101.13
全日本学生馬術連盟	80	0	0	80	0	100.00
全日本高等学校馬術連盟	91	13	8	96	5	105.49
日本乗馬少年団連盟	64	0	1	63	△ 1	98.44
日本社会人団体馬術連盟	30	0	1	29	△ 1	96.67

## (2) 乗馬登録数

区 分	H26. 3. 31 (A)	登録	抹消	H27. 3. 31 (B)	差引増減 (△減)	対前年比 (B/A)
乗馬登録数	3,755	499	519	3,735	△ 20	99.47

## (3) 平成26年度 FEI登録者数

区 分	選手	馬匹
障害馬術	76	112
馬場馬術	21	30
総合馬術	12	19
エンデュランス	19	19
軽乗	1	-
パラ馬術	-	1
合 計	129	181

## (4) 平成26年度 FEIパスポート交付・更新数

新規交付	11
更 新	27
変 更	28
再発行	5

(うちマイクロチップ埋込み 1件)